生涯学習応援研修旅行実施報告

『一乗谷朝倉氏遺跡など越前・近江の歴史文化遺産を訪ねる』

昨年度第３回生涯学習応援講座では、元文化庁主任文化財調査官の河原純之先生を講師にお招きし「戦国大名の興亡～福井県遺跡の発掘を中心として～」と題して開催し、約 70 名の方が参加された。

この結果を受け、本年度の研修旅行は 10 月３日～5 日の３日間の日程で、特別史跡である一乗谷朝氏遺跡及び安土城跡の２か所をメインに視察することにした。参加者は総勢 21 名、幸いにも講師として河原先生が我々と一緒に同行していただけることになった

第１日目（10/3）

朝７時、千葉駅前から貸切バスにて一路近江・越前方面へ向け出発。さっそく、参加者の自己紹介や参加された理由など聞いたところ、一乗谷朝倉氏遺跡には一度行ってみたかったところだという期待の声が多かった。

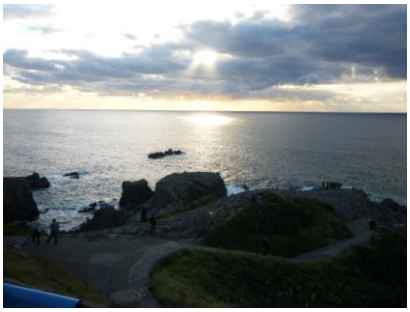
越前まではかなりの遠征。途中昼食タイムを取りながら、午後３時ごろに最初の見学先である北の庄城址・柴田公園に到着。遺構等は完全に消滅し見ることはできないが、河原先生から発掘調査により一部確認された堀、石垣の構造等について解説していただいた。柴田神社境内にある勝家公とお市の方、三姉妹の銅像を見ながら、当時のお江たちの暮らしに思いを馳せた。

続いて、北陸屈指の景勝地として名高い東尋坊へ。断崖絶壁は迫力満点。日没に近い時刻であったので、夕陽を浴びて光り輝く美しい日本海の風景を楽しむことができた。あとは温泉が待つ三国のホテルへ。

夕食会では皆様大変お元気な様子で、ほぼ全員が自慢のカラオケを披露するなど親睦の楽しいひと時を過ごすことができた。

－北の庄城址・柴田公園にて－

－三姉妹像－



－東尋坊から見た夕陽－

第２日目（10/4）

バスにて、研修旅行のメインである一乗谷朝倉氏遺跡へ向け出発。現地までは約１時間の行程があったので、さっそく初代朝倉氏遺跡調査研究所長とし発掘調査及び環境整備に尽力されたこともある河原先生に車内講義をしていただいた。先生にはマイク片手に発掘調査の経緯、成果、また当時の生活の様子などについて分かりやすく解説していただいた。

まず一乗谷朝倉氏遺跡資料館へ向かい、ここでは館長の吉岡泰英氏に迎えられ、館内に展示してある朝倉氏の歴史、出土した武具類、生活用品などについて説明をいただいた。

次いで、一乗谷川下流沿いの細長い谷あい築かれた一乗谷朝倉氏遺跡の主要部を中心に案内していただいた。コースとしては、当時の町並が立体的に復元され復元町並として公開されている地区から散策を開始。ここには計画的に作られた道路挟をはさんで小規模な町屋が並び、井戸や厠なども再現、反対側は土塀を張り巡らされた重臣の屋敷跡が、発掘された遺構をそのまま見せる手法で保存されて

いた。道路を下っていくと、その一画に復元された武家屋敷があり、主殿を中心に門、掘り抜き井戸、蔵、納屋、厠などもリアルに再現されていた。

ー復元町並ー

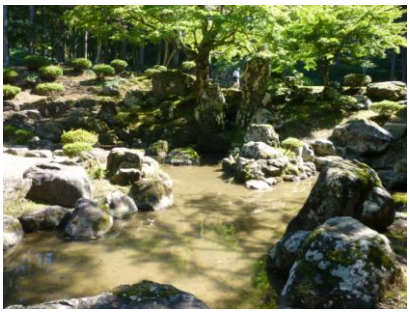
ー復元町並　土塀の様子ー

ー土塀の内側　屋敷跡ー

次に、川を渡り正面には義景の菩提を弔うために建てられたと伝わる唐門のある朝倉氏館跡へ廻った。三方を壕と土塁が巡り、敷地には 17 棟の建物の礎石が整然と配置され、庭園や花壇などの施設もあるなど、栄華を極めた朝倉氏の一乗谷文化をそのまま体感することができた。館跡を見下ろす山腹に上がると、国の特別名勝に指定されている見事な湯殿跡庭園、諏訪館庭園等を見ることができた。

ー朝倉氏館　唐門ー

ー上から見下ろした館跡ー



ー諏訪館跡庭ー

午前中の視察を終え、次の永平寺に向かう車内では、この研修旅行に参加された応援団ちば理事の明石要一氏(千葉大学教育学部教授)から、福井県の教育事情、県民性などについて興味深いお話をしていただいた。昼食後、道元禅師によって開創建された座禅修業の道場である永平寺へ。通用門から境内に入り、順路に従い回廊で結ばれた七堂伽藍を巡りつつお参りした。参拝の心得として一切の私語は禁止。きれいに磨かれた廊下を歩きながら、一時ではあるが心身の引き締まるものを実感した。所用のある明石氏とはここでお別れし、バスは一路長浜へ。

現在の長浜城は、昭和 58 年に長浜歴史博物館として開館。短時間ではあったが展示室の国友鉄砲、秀吉と長浜の文化に関する資料、浅井三姉妹の系図などを見学した。５階の展望台からは雄大な琵琶湖と山々のパノラマを楽しんだ。そして、近くに建つホテルへ。

夕食会では、参加者から様々な考古学的な質疑応答があり、また明日に視察する安土城祉の概要等について河原先生からお話をいただいた。

ー長浜城歴史博物館ー

第３日目（10/5）

朝９時、最後の研修先である安土城跡へ到着。曇り空で雨にならないか心配されたが、午前中の視察にはまったく影響がなかった。現地では前滋賀県立安土城考古博物館長の近藤 滋氏の出迎えを受け、立派な研究資料『特別史跡安土城跡』まで用意してくださり、見学ルートを辿りながら丁寧にご

案内をいただいた。安土山の南面の大手石塁跡からスタート。山裾の大手門から山腹までの大手道は、幅は6mと広く、約180mの立派な石段が直線的に続く。大手道を少し上がると、通路に接して数段の高石垣を配した伝羽柴邸跡、伝前田邸跡等の屋敷の跡が見られた。また、所々で、石段の踏み石や縁石に石材として転用された石仏や五輪塔などが確認されたことは印象に残った。

直線の石段を上り詰めると左折し、だんだん道幅が狭く急な七曲状になった。だんだん登るのがきつくなってきたが、信長公が上り下りする姿を想像しながら、やっと安土城の主核部への入り口である黒金門跡に到着。このあたりの石垣は他のとこに比べ大きな石が使われており、その構築技術の高さに驚かされた。

－大手石塁跡にて説明－

－大手道　180mもの石段－

－城内へ　本丸をめざして－

城内に入り、二の丸の石垣を見ながらひときわ大きな広場となっている本丸跡へ。調査の結果、この場所に天皇を迎えるため、信長公が用意した本丸御殿が建てられていたことが確認された。そして、最後の石段を登ると、眼前に天主台の礎石群が飛び込んできた。現在は周囲を低石垣に囲まれ、礎石が東西10列、南北10列に整然と並ぶだけであるが、この部分を地下にして、その上に５層七階の壮大な天守が聳えていたことを想像するだけで、今この場所に立てた喜びと感動で胸がいっぱいになった。この日は曇っていたが、天守台から見える琵琶湖の眺めは、歩き疲れを忘れさせるものであった。

本丸、天守跡の見学を終えると、大手道を戻らずに摠見寺跡をまわるルートで、当時のまま残っている三重塔や仁王門などを見ながら参道、裾部の歩道を歩いて下山した。所要時間はゆっくり巡って約2時間30分。参加者全員が登城。お疲れ様でした。

最後に、後藤氏の案内で近くにある「信長の館」を訪れた。ここには、安土城天主の5・6階部分が内部の障壁画とともに原寸大にて復元されており、改めて、豪華絢爛という言葉にふさわしい天主を持つ安土城の姿を窺い知ることができた。

－本丸跡－

－天主跡－

－天主跡みた琵琶湖方面の景色－

３日間、何とか天候にも恵まれ、参加者の皆様のご協力をいただきながら無事終了しました。感謝申し上げます。同行された講師の河原先生には、随所で分かりやすい解説をいただくとともに、地元研究者との交流の機会についてご配慮をいただきありがとうございました。本当に有意義な研修旅行になりました。　　（ 応援団ちば　研修旅行代表　種田　斉吾 ）

参加された皆様から寄せられた感想

■「歴史文化遺産にふれて」　　箕浦　有　さん

特別史跡の一乗谷朝倉氏遺跡や安土城跡など、戦国時代の遺跡や室町時代の寺院などを訪ねました。研究者の方の説明を聞き遺跡を散策しながら、戦国の世を生き抜いた朝倉氏や織田信長などの武将たちに思いを馳せました。現役の放送記者時代、遺跡の特徴や性格など遺跡の意義付けの取材活動に集中していただけに、今回の研修旅行は有意義な旅行であったと感じています。参加した方々との交流を深めることができたことにも感謝しています。

■「戦国時代をまるごと体験の旅行」　　中川　桂子　さん

〃夏の夜の夢路はかなき跡の名を　雲井に掲げよ山ほととぎす〃

〃さらぬだに・・・・・・〃　越前北の庄城 勝家とお市の辞世の句。　私は永年の夢が実現して銅像の前で涙・涙・・・。一乗谷朝倉氏遺跡へ。40 年以上の発掘で再び往時のまま再現された特別史跡、かって訪れたボンペイよりも「日本の国宝」を実感。さらに幻の安土城へ。当時のままの長い階段、両側の各武将邸跡、そして天主跡、・・・感動のみ。この貴重な旅に心から感謝します。

■「越前・近江路を旅して」　　木村　さと　さん

初めて参加した今回の研修旅行は「おもしろかった！ 楽しかった！」の一言に尽きます。なぜなら、一乗谷・安土城跡の見学で、実際に発掘、復元に尽力された河原先生はじめ、皆様の話を聞くことができたからに他なりません。今までなら案内書があっても見逃していただろう箇所の重要さや、復元した時期によって出来上がった形態に違いができることがある等、あげれば切がありませんが、私のような素人にもよく分かるよう解説していただいたおかげです。

長時間のバス研修でしだか、車中でも和気あいあいで楽しく過ごすことができました。このような研修をもっと早く知っていたらと勿体なく思いました。最後に参加された皆様、企画していただいた事務局の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

■「一見に如かず・一乗谷」　　金子　恒三　さん

朝倉義景と云えば、一見公家風の柔和な男というのが講談全集からのイメージであった。こんな男に格好いい浅井長政が何故組したのか、先代からのシガラミとはいえ、納得できなかった。今回、河原先生の謦咳に接し、広く整えられた遺跡・資料等に出会ってビックリ仰天。この地だけ戦乱の埒外にある筈がなく、朝倉 5 大 103 年の間、公家・文人等の頼れる安穏の地であったとはいえ、主家の守護斯波氏を排すると共に、領地の整備拡張のため戦い抜いたという印象を強く受けた。

朝倉氏のイメージが変わると共に、一向一揆への関心が強まり、五木寛之の蓮如を読了したところである。